

土地利用からみたグリーンツーリズムの持続性に関する研究

—群馬県みなかみ町「たくみの里」を事例として—

A Study on Sustainability of Green Tourism from a View Point of Land Utilization

-A Case of Takuminosato, Minakami Town, Gunma Prefecture-

氏名 田中 沙知

指導教員名 中島 正裕

1. はじめに

農村地域振興策として 1990 年代以降、グリーンツーリズム(以下、GT)が注目され、現在は導入期から展開期を経て成熟期へと移行している。GT における中核的価値は“美しい農村景観”であるが、それは農地が適切に保全されてこそ成り立つ。しかし、昨今の農業情勢をみると、特に中山間地域では耕作放棄地や担い手不足など多くの問題を抱えており、農地の適切な保全が困難となってきている。これは GT の持続性の観点からも看過できない課題であるが関連する研究はない。本研究では、GT 導入地域における①全域の土地利用状況の解明、②個別集落の営農状況の解明、③GT の持続性の確保に向けた農地保全の課題の抽出、を行う。

2. 研究方法

2.1 研究対象地の概要と選定理由

群馬県みなかみ町新治地区須川・東峰須川・谷地・笠原集落にまたがる、「たくみの里」を対象とした。昭和 53 年以降 9 つの野仏を巡る「野仏巡りコース」や伝統工芸体験が行える「職人の家」(現在 29 軒)が設置され、現在年間 30 万人が訪れる GT 先進地域である。

メインストリートエリアは、景観条例などにより旧三国街道の面影を残し、「豊楽館」などの都市農村交流施設が立地する。メインストリート以外は、美しい田園風景が広がっており、野仏巡りなどを通して来訪者の満足評価が高い¹⁾一方、ここ 3、4 年の間に、耕作放棄地や獣害などの発生が地域住民から指摘されるようになった。

2.2 調査・分析方法

目的①では、たくみの里内の一筆ごとの土地利用調査(125.9ha、1633 筆)によりデータベース(GIS ソフト: ArcGIS10.1)を作成し、土地利用状況を分析する。さらに(財)みなかみ農村公園公社へのヒアリング調査および資料調査を行い農地利用状況と観光資源の関係性を分析する。目的②では、谷地集落を対象に、全 18 世帯にヒアリング調査(世帯・農業・獣害・観光に関する約 50 項目)を行い、営農実態を分析する。目的③では、目的①・②の結果より課題を抽出する。

3. 全域レベルの土地利用状況の結果

3.1 土地利用状況の分析

土地利用状況を 4 分類 14 細目に区分して整理した結果を表 1 に示す。農地に占める作付地の割合は 78.3%であったのに対し、耕作放棄地は 14.9%であった。

また、耕作放棄地は状況によって 3 種類に分類でき、大半が細目 7 の草本レベルの耕作放棄地であった。

3.2 農地利用状況と観光資源の関係性の解明

農地利用状況と観光資源の分布を重ね合わせ、ここでは 4 つのエリアに分類した結果を図 1 に示す。

【エリア①: 須川集落】白壁など昔ながらの集落景観が残るたくみの里のメインストリートを有するエリアである。来訪者の目線からは認識しづらいが、メインストリートのすぐ裏手には細目 7 の草丈レベルの耕作放棄地(1.4ha)があった。その周辺農地では、サルによる獣害が深刻化していることも明らかになり、観光客への被害も心配されている(ヒアリングより)。

【エリア②: 谷地・東峰須川・須川集落】寺通り・庄屋通りにまたがるエリアである。圃場整備が大規模に実施され、一部が中山間地域等直接支払制度の対象農地でもある。耕作放棄地が少なく(1.0ha)、美しい水田景観が広がっている。また観光果樹園も立地している。

【エリア③: 東峰須川集落】宅地と畑地が混在しており、観光施設は庄屋通り沿いにまとまって立地しているエリアである。観光施設周辺には耕作放棄地はほとんどないが、観光客の目につかない山際で細目 8 の笹・桑が繁茂した耕作放棄地(0.9ha)があった。

【エリア④: 谷地・笠原集落】野仏巡りのゴールである泰寧寺が立地し、エリア②から見ると、里山が背景に広がる農村景観を有するエリアである。しかし、沢・用水沿いに細目 9 の林地化した耕作放棄地が多く(1.0ha)、野仏巡りなどで散策する際に通る道沿いにも細目 7 の草本レベルの耕作放棄地が発生していた(4.6ha)。また緩い傾斜が続くという地形上の特性から、このゾーンへの観光客数は減少傾向にある(ヒアリングより)。

表 1 たくみの里における土地利用状況

分類	4分類	14細目	面積(ha)		全体		
			面積(ha)	全体%	面積(ha)	全体%	農地内%
農地	作付地	1:水田	32.0	25.4	76.9	61.0	78.3
		2:畑地	33.1	26.3			
		3:果樹	7.7	6.1			
		4:その他作付け	4.0	3.2			
	管理のみ農地	5:管理のみ農地	5.6	4.5	6.6	5.3	6.8
		6:管理された林地化農地	1.0	0.8			
	耕作放棄地	7:耕作放棄地(草本)	10.2	8.1	14.6	11.6	14.9
		8:耕作放棄地(笹・桑)	2.1	1.7			
		9:耕作放棄地(林地化)	2.4	1.9			
農地以外	農地以外	10:宅地	16.4	13.0	27.8	22.1	
		11:荒廃した宅地	0.5	0.4			
		12:都市農村交流施設	4.7	3.7			
		13:寺社	1.9	1.5			
		14:その他	4.4	3.5			

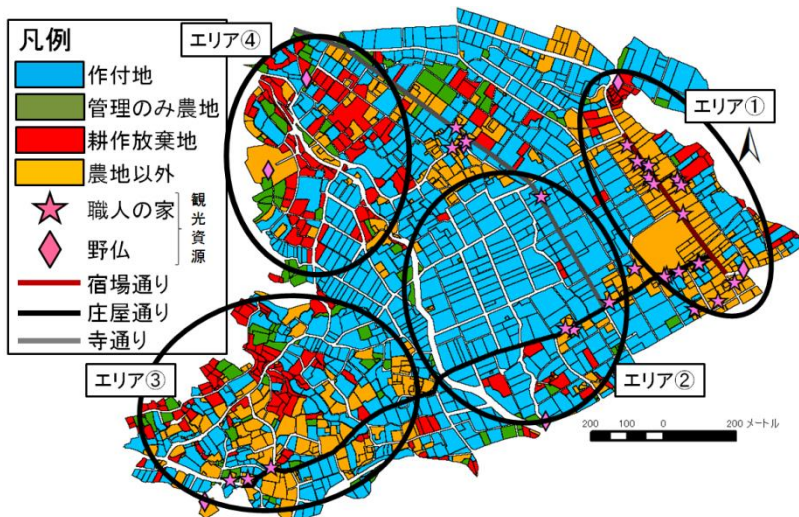


図1 土地利用状況と観光資源の重ね合わせ

4. 集落レベルの営農状況の結果

エリア②④は前述の通り、たくみの里での景観上重要なエリアである。これらのエリアの大半は谷地集落であるため、以下同集落を対象に営農実態を分析する。

4.1 谷地集落住民の営農状況

農地利用者の平均年齢は67歳であった。後継者は16人が決まっていない。しかし、うち9人は近年農業を継いだばかりで、平均年齢も56歳と若い。営農形態をみると、自給的農家は15人で、利用農地面積はいずれも12a以下(内5人が5a未満)であった。第2種兼業農家は2人で、利用農地面積は1.5haと1.0ha(+谷地外に1.6ha)であった。専業農家は1人で、利用農地面積は5.2haであった。たくみの里事業との関わりをみると、豊楽館への農産物の出荷農家が10人であった。

4.2 農地の利用・所有状況

農地の利用・所有形態は4パターンに分けられ各面積を表2に示す。谷地集落の農地(36.6ha)の54%(19.7ha)は他集落住民が利用していた。また、谷地住民が利用する農地(16.9ha)であっても30%(5.0ha)は他集落住民の所有地であった。さらに、谷地集落の耕作放棄地4.5haのうち72%(3.2ha)は他集落住民の所有・利用地であった。

5. GTの持続性の確保に向けた農地保全の課題抽出

耕作放棄地に関しては、先行研究²⁾において来訪者が耕作放棄地を認識するのは難しいという指摘がある。今回予備調査としてたくみの里全域で計5組の来訪者に耕作放棄地の認識を調査したが、来訪者の視点からは問題は現時点では顕在化していなかった。しかし耕作放棄は進行するにつれ復元に多額の費用を要するため、早めの対策を講ずる必要がある。

表2 農地の利用・所有パターン

		農地所有者		合計
		谷地住民	他集落住民	
農地利用者	谷地住民	11.9ha	5.0ha	16.9ha
	他集落住民	0.6ha	19.1ha	19.7ha

4つのエリア中で、唯一来訪者の散策する道沿いにも耕作放棄地が発生しているのがエリア④である。昨年10月からは、林地化した耕作放棄地で住民による管理活動(笹刈、草払いなど)が開始された。しかしこのような活動が困難である場合は、農振農用地の解除を検討する必要がある。

また、現在作付けが行われている農地であっても、農地の利用・所有の関係性をみると、今後の持続的な保全に関して課題がある。谷地集落の農地の分布を利用・所有形態から示したものが図2である。

エリア②に着目すると、谷地集落の農地であるが半分以上は他集落住民の所有かつ利用農地であった(図中赤色)。また、エリア④に着目すると、農地利用者は谷地住民が多いが、その農地所有者は他集落住民が多い。その中で専業農家のA氏に着目すると、同氏は12人の他集落住民から農地3haを借用し集約的に利用している。これらの農地の多くは所有者の高齢や死亡により依頼を受けたものである。しかしA氏自身(69歳)も後継者はおらず、貸借においても利用権設定を行っていないことから、将来的な農地利用に関して不安定な状況である。

以上の結果から、今後谷地集落の農地保全を進めていく際には、谷地集落住民だけではなく、他集落在住の農地所有者・利用者を含めて検討する必要がある。その際今回の結果はその意思決定支援の一助となる。

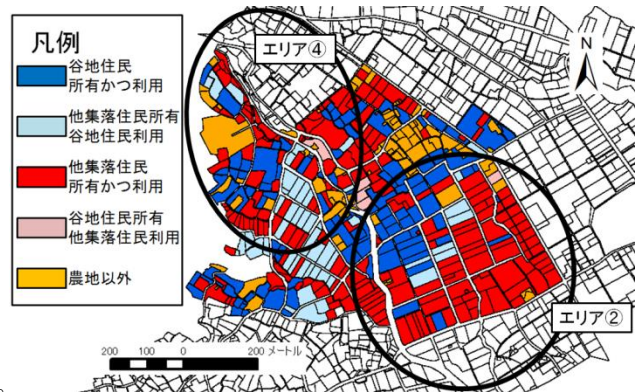


図2 エリア②、④の農地の利用・所有パターン

6. まとめ

本研究ではGT導入地域での土地利用と営農実態を解明し、GTの持続性の確保に向けた農地保全の課題を明らかにした。今後本研究の結果を基に、住民主体による農地保全に向けた地域支援を行ってきたい。

注釈

1) 中島正裕ら(2006): 来訪者の意識・行動からみた農村地域の観光資源の特性—都市農村交流による農村地域活性化の計画づくりに関する研究 その1—, 農村生活研究, No.130, 31-41

2) 栗田英治ら(2009): 地域住民及び地域外住民による棚田景観の認知・評価構造, 農村計画学会誌, No.27, 論文特集号, 257-262